

書評：フランシスコ・J・アヤラ

『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』（藤井清久訳）、
教文館、2008年。

京都大学文学研究科教授
芦名定道（あしな・さだみち）

本書の著者アヤラは進化遺伝学の分野で著名な生物学者（現在、カリフォルニア大学アーヴァイン校教授）であり、本書は、反進化論思想として最近話題の「^{インテリジェント・デザイン}知的設計（ID）」論を論駁しつつ、「科学と宗教的信仰とが対立する必要はない」ことを示すことを目的としている。進化論とキリスト教創造論の間に深刻な対立（アメリカにおける公教育での進化論の扱いめぐる裁判など）が存在することは日本でも良く知られているが、「科学と宗教」の対立論は、現代思想の主流でも、キリスト教思想の代表でもない。対立論の対極に位置するのが科学と宗教の分離論であり、アヤラはこの立場に立っている。

本書では、まずキリスト教自然神学と進化論を代表する、ウィリアム・ペイリとチャールズ・ダーウィンの思想が検討される。多様な生物の複雑かつ精巧な器官とそれによる自然環境への見事な適応とをいかに説明できるかという近代生物学の基本問題について、ダーウィン以前において最も有力だったのは、キリスト教自然神学の学説であった。ペイリは、この問題は全知にして全能な神（知的設計者）の「設計」を前提とするときにのみ解決可能になると論じたが、そこには、生物に見られる様々な不完全性や機能障害の説明に関する難点が存在した。ダーウィンの進化論は、このペイリが取り組んだ問題に科学的解答を与える試みであったと解することができる。実際、著者が論じるように、「進化」はダーウィンの発明ではなく、キリスト教思想の中にも類似の議論が確認可能である。むしろダーウィンの真の新しさは、「自然選択」論に求められねばならない。生物の見事で多様な設計とその不完全性が、知的設計者としての神なしに、「生物の環境への適応を促す、自然的選択プロセスの結果」として説明されたこと、これが画期的だったのである。

続いて著者は、進化論が科学的事実であること——分子生物学による「生命の全体系統樹」の再構成などを証拠として——へと議論を進め、これに基づいて、ID論の徹底的な論駁を試みる。要点は、次のようになる。ID提唱者は、進化論では説明できないとされる生物学的現象（目などの「単純化できない複雑なシステム」）を挙げることによって、ID論の正しさを論証しようとするが、これは、「進化論がくつがえされれば、その分だけIDが確証される」という誤った二分法に基づいている。ID論は、検証可能な科学的仮説ではなく、神に自然の不完全性や欠陥の責任を帰する点で、良き神学でもない。進化論については、神の世界創造と現実の悪（欠陥や不完全性）とがいかに両立できるのかという古代からのキリスト教神学の難問に一つの解答を与えたとの評価も不可能ではない。

著者の立場は分離論であり、科学と宗教にその専門領域を超えないことを要求する。この要求は、ID論だけでなく無神論的自然主義者（リチャード・ドーキンスら）にも向けられねばならない。著者によれば、科学は「方法論的に自然主義的」であるが、「形而上学的唯物論」（＝反宗教）ではない、科学と宗教とは「知識の重複しない領域」であり、本来対立することはあり得ない。形而上学的無神論とID論という二つの原理主義の克服こそが科学と宗教の適切で積極的な関係構築の前提であることを考えるならば、本書は、このような課題に取り組む者にとって、適切な出発点、良き入門書と言わねばならない。